英語圏人文地理学における「酒精・飲酒・酩酊」に関する研究動向：日本における今後の事例研究に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 九州大学大学院人文科学研究院地理学講座 公開日: 2017-06-19 キーワード (Ja): 酒精(アルコール), 飲酒, 酩酊, アルコール関連問題, 健康 キーワード (En): alcohol, drinking, drunkenness, alcoholrelated problems, health 作成者: 杉山, 和明, 二村, 太郎 メールアドレス: 所属: 流通経済大学, 同志社大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180105-001

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	英語圏人文地理学における「酒精・飲酒・酩酊」に関する研究動向 ： 日本における今後の事例研究に向けて
Author	杉山, 和明 / 二村, 太郎
Citation	空間・社会・地理思想. 20 巻, p.97-108.
Issue Date	2017
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	九州大学大学院人文科学研究院地理学講座
Description	
DOI	10.24544/ocu.20180105-001

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

空間・社会・地理思想 20 号，97-108 頁，2017 年
Space, Society and Geographical Thought

英語圏人文地理学における「酒精・飲酒・酩酊」に関する研究動向
――日本における今後の事例研究に向けて――

杉山　和明 *、二村　太郎 **

kazuaki SUGIYAMA, Taro FUTAMURA

Research Trends of "Alcohol, Drinking, and Drunkenness" in Anglophone Human Geography: Towards Future Case Studies in Japan

キーワード：酒精（アルコール）、飲酒、酩酊、アルコール関連問題、健康

Ⅰ　はじめに

本稿は、英語圏人文地理学において近年盛んになってきている「酒精・飲酒・酩酊」に関する研究動向を把握することを目的とする。英語圏における辞典・便覧・教科書、専門書、国際学会・会議の報告などを概観しながら、地理学内において酒精・飲酒・酩酊がどのような概念枠組を用いて取り上げられてきたのかを考察する。こうした作業を通じて筆者たちは、日本国内はもとより、将来的には日本のアルコール飲料メーカーおよび外食産業が影響を及ぼす諸外国において、関連する研究課題を探求していくための基礎的な視座を示したいと考えている。

本題に入る前にまず、日本におけるアルコールに関する地理学的研究の主題について、臼井・張（2010）を参照することで確認しておきたい。この展望研究は、CiNii（NII学術情報ナビゲータ）および地理系雑誌の論文目録を用いて戦後に日本語で発表された地理学的研究を列挙し、四つの時期区分（第一期として戦後から1981年、第二期として1982 ～ 1992年、第三期として1993 ～ 2001年、第四期として2002年から2008年現在）に従って整理したうえで、酒類別（清酒、ビール、焼酎、ワイン、その他）、分野別、研究者別の傾向を分析している。その結果、全体として研究の蓄積が不足し分散的であること[1]、経済学的視点への偏りが見られ、文化人類学的視点からの研究が少ないこと、酒類別では清酒が取り上げられることが多く、清酒製造業に関する研究が主要な傾向であること、販売店や消費者側に着目してこなかったことなどの傾向を指摘している。そのうえで、酒の文化的側面に配慮した「文化的アプローチ」を取り入れるとともに、隣接分野の成果も踏まえた研究を活性化させることが必要であるとしている。

ここで挙げられた課題を受けたものとして、臼井・横山（2013）は、東アジアの伝統酒を対象とした研究について、酒造と飲酒の文化的側面に着目した展望を行っている。考察の結果、今後の研究視点として、①「これまで研究アプローチ方法が確立されていなかった飲酒の地域差を解明する必要性」、②「グローバル化や飲食文化の画一化の影響によって、飲酒の地域性が失われつつある中で文化的側面から地域の伝統酒の存在意義を再考するための研究の必要性」、③「伝統酒の地域性を解明するための経済的、文化的、自然的、そして技術的な地理学的な総合的視点からの多面的研究アプローチを採用する必要性」を提示している（2013 :14）。

二つの展望が示しているのは、日本の地理学的研究においても、従来からの研究課題の継承とともに、新たな展開が期待される段階にきているということである[2]。臼井・張（2010: 233）に従えば、「隣接分野の研究成果をレビューすることによって、酒に関する地理学的研究の課題や研究の方向性がよりはっきり見えてくる。様々な分野による活発な研究が期待される」といえよう。

本稿では、「文化的アプローチ」に関しては見解の相違はあるものの、こうした問題意識を共有しつつ、英語圏人文地理学の状況を見ていくこととする。すでにさまざまな分野の議論を融合させた知見を提起している英語圏の状況を参照することで、日本の地理学内においてもさらに多様な展開が期待できると筆者たちは考えるからである。ただし、関連文献の詳細なリスト作成を目指すのではなく、酒精・飲酒・酩酊に関する研究が現在どのような段階にあるのか、その概況を示すことを優先する。そうすることで、アルコールを対象とするさまざまな学問分野から構成されるアルコール研究alcohol studiesにおい

＊　流通経済大学経済学部
＊＊　同志社大学グローバル地域文化学部

て、英語圏地理学の占める位置づけの一端を明らかにすることにしたい。

構成は以下のとおりである。まずⅡでは、辞典・便覧・教科書の記述とアメリカ地理学会における報告の特徴を示す。Ⅲでは、関連する専門書の中心テーマを明らかにする。酒精・飲酒・酩酊を主題として扱っている代表的な書籍を時系列的に紹介し、それらのなかでも、主にJayne et al.（2011）の構成と内容を解説する。Ⅳでは、最近の研究動向として、学際的な国際会議の動向、そして、健康・医療地理学とアルコール関連問題に関する研究動向を紹介する。そしてⅤでは、本稿の結論を述べ、日本におけるさらなる研究に向けて、筆者たちの考えるいくつかの課題を提起する。

Ⅱ　辞典等の記述と学会報告の動向

1　辞典・便覧・教科書の記述

英語圏人文地理学において、特定のテーマに関する研究が一定程度蓄積され、学問分野内に定着しているかどうかを知るためには、すでに定評のある辞典や便覧、教科書などを参照してみることが近道であろう。ここでは、数ある文献を網羅することを目的としているわけではないため、手元にある代表的な書籍に限ってアルコールや飲酒に関する記述をたどってみることにしたい。

まず、英語圏人文地理学の理論的動向を最も包括的に解説していると考えられる*The Dictionary of Human Geography 5th Edition*（Gregory et al. 2009）を開いてみると、意外なことに、アルコールや飲酒に関する記述は二つの項目のなかに見受けられるだけであった。具体的には、skid rowの項目において、「福祉、アルコール、ドラッグ、健康などの課題」を抱えるサービス依存者についての記述（p.686）が見られることや、everyday lifeの項目において、日常生活を構成する広範な活動のひとつとして飲酒を列挙している程度であり（p.223）、いずれもアルコールを正面から取り上げる記述にはなっていない。また、2010年に刊行された6巻物の*Encyclopedia of Geography*（Warf 2010）にもアルコールや飲酒に関する記述は皆無である。

日常生活の文脈でアルコールに関する説明がなされてきたかどうかを調べるために、2000年代の初頭に刊行された*Handbook of Cultural Geography*（Anderson et al. 2002）も参照したが、都市景観の説明のなかで、消費に関連した余暇活動の一種として飲酒を列挙する記述が見られたことと（p.16）、宗教以外での主体形成の例として、アルコール依存症からの回復を目指す断酒会AA（アルコホーリクス・アノニマス）のプログラムが紹介されていただけである（p.292）。このほかにも、いくつかのハンドブックに当たってみたが、詳細な記述は見受けられなかった[3]。

他方、都市社会地理学の定評ある教科書*Urban Social Geography: An Introduction*の最新版である第六版（Knox and Pinch 2010）には、酒精・飲酒・酩酊に関連づけられる記述を随所に見つけることができる。ここでは、2013年に出版された邦訳の記述から、それらの内容を紹介することにしたい。

本書には、最新の動向をいち早く紹介するために、本文の記述とは別にボックスが設けられおり、この欄に、酒精・飲酒・酩酊に関する記述が見られる。特に、Box 4.1 ＜都市社会地理学の動向5＞の「学生街の成長」（p.83）、Box 5.4 ＜都市社会地理学の動向6＞の「バルセロナの復活」（p.117）、Box 10.5＜都市社会地理学の動向17＞の「都市のナイトスケープの発展」（p.237）、Box 11.3＜都市社会地理学の動向18＞の「ダブリンの再発展」（p.257）には、酒精・飲酒・酩酊に関する研究の最新動向についての記述がある。もちろん、本文中を細かく見ていくと、飲酒についての記述は他にも何カ所かみられるが、索引としてアルコール関連の語句が取り上げられているわけではない。このことからも、飲酒や酩酊に着目した研究が、英語圏人文地理学において新しい動向として把握されているということは確かであるといえよう。

ただし、第五版（Knox and Pinch 2006）には、第四版（Knox and Pinch 2000）にはなかった同様のボックスが掲載されているため、2006年時点ですでに先端動向とみなされていたことがわかる。さらに、上述のボックスでは、Ⅲの1でも紹介するChatterton and Hollands（2003）をもとに、ナイトスケープの変容と飲酒の関係および夜間経済と歓楽街の発展を解説していることから、本書で取り上げられた新たな動向が、若者の飲酒や酩酊に関わるテーマから派生した研究であることは明白である。Box 10.3＜都市社会地理学の動向14＞の「子どもと若者文化の地理を理解する方法」（p.235）にもあるように、時代と場所によって多様な行為様式に関する規制について、子ども・若者研究のなかでは従来から注目されてきた。実のところ、若者の地理を対象にする研究においては、夜間経済やナイトスケープへの関心が1990年代

から継続していたことは再確認しておきたい（たとえば、杉山 2003; Valentin and Skelton 1998; Wilkinson 2015）。

以上見てきたように、英語圏人文地理学において、代表的な辞典等の記述にはみられなかった酒精・飲酒・酩酊への関心が、新しい動向として紹介されるようになり、徐々に定着しつつある状況を伺うことができる。

2　アメリカ地理学会における酒精・飲酒・酩酊に関する報告

アメリカ地理学会（AAG）が開催している年次報告大会は、報告数や発表者数、発表者の出身国と報告テーマの多様性などを考慮すると、英語圏で発信する地理学者にとって最も重要な地理学関連の学術大会のひとつとして位置づけられよう。

学会のウェブサイトでは、年次報告大会の発表タイトルを検索するシステムが整備・公開されており、2005年以降の報告内容を知ることができるようになっている。筆者たちは、このシステムを用いて、2005 ～ 2013年の9年間における酒精・飲酒・酩酊に関する動向を調査した。個々の発表報告のタイトルやテーマについての具体的な分析については別稿に譲ることとし、ここでは概要を述べておきたい。

学会発表タイトルの動向から読み取れるのは、まず、キーワードに酒精・飲酒・酩酊が含まれた報告が、例外の年もあるものの、増加傾向にあるということである。これらの発表タイトルから研究動向を大まかに分類すると、①イギリスの文化・社会地理学者による都市と消費文化からみた飲酒研究、②空間分析研究による飲酒と都市・安全の問題、③その他、に分けられる。

他方、キーワードにワインが含まれた報告を調べてみると、10 ～ 20本ほどの報告が毎年行われている。AAGにはワイン・ビール・スピリッツの地理学専門部会（Geography of Wine, Beer and Spirits Specialty Group）が設けられているように、個別のアルコール飲料の研究が盛んに行われてきたが、特にワインについては、ワイン産業、産地の歴史文化、観光などの領域に焦点を当てた研究が継続的に発表されており、地理学内では伝統的に確立された研究領域といえる[4]。ビールについても同様で、ここ数年の大会ではGeographies of Beer Interactive Sessionという短時間の発表を連続して行うセッションが毎回開催されている。

新たな傾向として考えられるのは、酒精の生産や流通ではなく、消費に目を向ける研究の増加である。AAG年次報告大会の発表総数からすれば微々たるものには違いないが、酒精・飲酒・酩酊に関する研究が活発に行われるようになってきていることは確かといえよう。

III　酒精・飲酒・酩酊に関する書籍の中心テーマ

1　酒精・飲酒・酩酊を扱っている代表的な専門書

英語圏の地理学者が発表してきた酒精・飲酒・酩酊に関わる論文は相当数に上る。本稿ではそれらの詳細な検討については割愛し、まとまった成果としてとらえることができる主要な書籍に絞って、論題別に列挙しておきたい。

酒精・飲酒・酩酊に関する総合的な研究書として最初に挙げておきたいのは、2011年に出版された*Alcohol, Drinking, Drunkenness: (Dis)Orderly Spaces*である（Jayne et al. 2011）。これは、「酒精・飲酒・酩酊の地理」に焦点を合わせて、都市、農村、年齢、家族、ジェンダー、エスニシティといった地理学の従来からのテーマと飲酒という行為を関係づけてとらえた初の書籍といえる。筆頭著者のMark Jayneは消費社会に関する研究、Gill ValentineとSarah Hollowayは子ども・若者および家族に関する研究を中心に、いずれも数多くの著作を発表しており、イギリスにおける社会・文化地理学を牽引してきた研究者たちである。

このほかにも、2016年に出版された各国の飲酒にかかわる現代の諸問題を論じた学際的な論集*Drinking Dilemmas: Space, Culture and Identity (Sociological Futures)*は、多様なテーマを総合的に扱った著作といえる（Thurnell-Read 2016）。

次に、個別のテーマのなかで重要な潮流を創出しているものとしては、夜間の歓楽街における飲酒空間を取り上げた著作が挙げられる。なかでもⅡの1で紹介した*Urban Nightscapes: Youth Cultures, Pleasure Spaces and Corporate Power*は、最も影響力のある論考といえるだろう（Chatterton and Hollands 2003）。イギリスの諸都市を対象としてナイトスケープの生産・消費・規制を初めて包括的に考察したこの著作は、Routledge社のCritical Geographiesシリーズとして2003年に刊行されている。出版から14年を経た現在でも、都市論の関連分野で引用され続けていることから、すでにネオ古典ともいえよう。

関連するテーマを扱った著作として、ロンドン

においてセキュリティに対する不安から実施されたパブの営業規制について検討した*Regulating the Night: Race, Culture and Exclusion in the Making of the Night-time Economy*が、2007年に出版されている（Talbot 2007）。著者は地理学者ではなく犯罪学者だが、Ashgate社 のRe-materialising Cultural Geographyシリーズに納められている。

また、2011年に出版された*Roppongi Crossing: The Demise of a Tokyo Nightclub District and the Reshaping of a Global City*は、歓楽街としての六本木の形成と近年の変容、とりわけ2000年代の外国人の取り締まりを中心に検討している（Cybriwsky 2011）。University of Georgia PressのGeographies of Justice and Social Transformationシリーズとして刊行されており、著者も著名な都市地理学者であることから、地理学分野の著作として位置づけられよう。

そのほかのテーマの著作では、世界各地のドラッグおよびアルコール関連問題を考察した*Using Space: Critical Geographies of Drugs and Alcohol*が2013年に出版されている（Moreno and Wilton 2013）。この書籍は、*Social & Cultural Geography*誌13巻2号（2012年）において、世界の諸地域のドラッグとアルコール関連問題を保健衛生の議論とも関連づけた特集Critical Geographies of Drugs and Alcoholのなかで掲載された諸論考をほぼそのまま収録したものである。さらに、2015年には、*Alcohol, Drinking, Drunkenness*の著者のうち二名による、幼年期および家族生活とアルコール消費の場面を詳細に分析した書籍*Childhood, Family, Alcohol*が出版されている（Jayne and Valentine 2015）。

このように主要な著作をテーマ別かつ時間軸に沿って概観してみると、最初に挙げた*Alcohol, Drinking and Drunkenness*は、共著ではあるものの担当章を分けておらず、テーマの一貫性が保たれているという点で他の成果と異なる特徴を有していることがわかる。同書は地理学における従来からのテーマとの関連性を明確に意識しつつ他分野の文献も幅広く渉猟していることなどから、これまでのところ最も包括的な研究成果といえよう。次節では、この書籍に焦点を合わせて、その成立過程について詳しく見てみたい。

2 *Alcohol, Drinking and Drunkenness* の端緒

世界の批判地理学者に向けて情報発信を行うメーリングリストCRIT-GEOG-FORUM（以下CGFと略称）は、英語圏人文地理学の最新動向を知るための有用な情報ツールといえるが、この投稿のなかで、*Alcohol, Drinking and Drunkenness*のもとになったプロジェクトに関する記述についても確認することができる。

はじめに2004年3月と9月の投稿において、ジョセフ・ラウントリー財団のプロジェクトDrinking Places: Social Geographies of Consumptionに従事する質的調査の技術を有した研究助手の募集があり（CGF Item #6807（16 Mar 2004 16:36）; CGF Item #7010（14 Sep 2004 10:42））、その後の2005年12月の投稿では、このプロジェクトに関係する報告の募集がある。その内容は、2006年8月30日から9月1日に開催されるイギリス地理学会RGS-IBGのセッションDrinking places: geographies of alcohol. abstinence, drinking and drunkennessにおいて報告を求めるというものであった（CGF Item #8250（19 Dec 2005 08:53））。主催者は、Sarah L. Holloway（ラフバラー大学）, Mark Jayne（マンチェスター大学）、Gill Valentine（リーズ大学）の三名である。

このセッションの目的は、人文地理学においても、酒精・飲酒・酩酊に関する研究を活性化させるべきであるとの認識のもと、国際的にさまざまな地理的スケールの実践や課題を取り上げることにあった。提案されたトピックは、①公的と（あるいは）私的な空間、②ジェンダー、③ライフコース、④立法・規制・政策、⑤感情的および身体化された地理、⑥商品連鎖、⑦断酒と禁酒、⑧アルコールツーリズム、⑨消費とアイデンティティ、⑩都市生活と（あるいは）農村生活であった。

実際には、大会初日の2006年8月30日に開催された同名セッションは二部制となり、それぞれ7本ずつ計14本もの発表が行われた（RGS-IBG 2006）。そのうち、主催者三名が加わった発表題目は、前半がGeographies of alcohol, drinking and drunkenness: a review of progress、後半がKnowing your limit: masculinity, femininity and alcohol consumptionであり、ともに最初の報告であった[5]。

3 *Alcohol, Drinking and Drunkenness* の構成と内容

前節で紹介したイギリス地理学会の発表後、主催者三名は、各種の学術会議において矢継ぎ早に報告を行うとともに、査読付き学術雑誌に次々と論文を発表していくことになる。それらのなかから10本の論文を取り上げて2011年に書籍としてまとめたのが、上述した*Alcohol, Drinking and Drunkenness* である。以下に各章の内容とそれらのもとになった論文

を見ていきたい。

序論 ―― 酒精・飲酒・酩酊の地理 Introduction: Geographies of Alcohol, Drinking and Drunkenness（pp.1-11）は、Jayne et al.（2008b, c）を下敷きにして書かれている。ここでは、人類学、社会学、犯罪学、政治学、社会政策、健康医療科学などの学問分野が、人々の生活において酒精・飲酒・酩酊の役割を探究する長い伝統を持っているのに対して、地理学者の関与は最近になってからであることが確認される。しかしながら、地理学者の最近の仕事は、酒精・飲酒・酩酊に結びついた複雑な政治的、経済的、社会的、文化的な実践や過程に対して、学術的、政策的、一般的な理解をもたらすうえで大きな貢献をしているとされ、スーパーナショナル、ナショナル、リージョナル、ローカルの空間スケールのあいだの繋がりを作り出し、それらの空間スケールの類似、差異、可動性を解きほどくことによって、概念的・経験的に新たな仕事が生み出されているという。こうした傾向から、地理学者は、人文地理学と酒精・飲酒・酩酊についてのより広範囲の研究とのあいだの対話のために、「翻訳規定translation-rules」の確立に携わる必要があり、この書籍の分析を通じて、酒精・飲酒・酩酊についての地理学的研究が、学問分野の課題と、広範なアルコール研究の課題の探求に貢献することが目指されている[6]。以下に、序章にある紹介記述（pp.10-11）を用いて、各章の中心テーマを記しておく。

第一章　都市The City（pp.13-28）は、Jayne et al.（2006）; Jayne et al.（2008a）をもとに書かれていることが確認できる。ここでは、18世紀後半から現代にいたるまで、飲酒の実践とそれに関連づけられた立法、政策、取り締まり上の戦略が、どのようにして構造的な都市の変化と結びつけられてきたのか、そして、アルコールが、どのように社会的もしくは医学的な問題として概念化され、都市生活の社会的・文化的な実践において必要不可欠の要素としてみなされてきたのかを探求している。

第二章　田園地方The Countryside（pp.29-42）はValentine et al.（2008）を元にして書かれたものである。酒精・飲酒・酩酊に対する態度が、「農村の田園生活the rural idyll」や人間と自然のあいだのつながりというイデオロギー上の概念と固く結びつけられている点に着目し、都市の飲酒と結びつけられた「モラル・パニック」が田園地方へ伝達され転換されることへの懸念と、イギリスにおける若年者の飲酒を取り巻く懸念の関係性を探求している。

第三章　家庭Home（pp.43-58）はHolloway et al.（2008）をもとにしている。公的・私的の飲酒環境が密接に結合しているという第二章でなされた主張に立脚して、家庭に出入りする際に人々にとってアルコールが何を意味するのかを探究し、家庭のイデオロギーがどのように家庭内の飲酒実践を支えているのか明らかにしている。

第四章　ジェンダーGender（pp.59-72）はHolloway et al.（2009）をもとにした論考である。ジェンダーに焦点を合わせて、どのように飲酒の実践や行動が、男性と女性にとって異なる方法で、差異と言説をもとに構築されるのかを考察している。公的・私的な立地における飲酒実践を形成するうえで、ジェンダー化された道徳性と同時に、多様な飲酒文化における他の形式の社会的差異の意義を精査している。

第五章　エスニシティEthnicity（pp.73-86）がもとにしているのはValentine et al.（2010a）であり、パキスタン人イスラム教徒の生活におけるアルコールの役割を検討している。非常に高い水準のアルコール消費と固く結びつけられた対立と緊張、そして、このことが結果として公共空間への接近や使用をいかに引き起こすのかを理解するために、禁酒文化における「不在の存在absent present」としてのアルコールを理論づけている。

第六章　世代Generations（pp.87-105）はValentine et al.（2010b）をもとにしている。ここでは、アルコール消費への態度および実践における世代間の変化に着目している。とりわけ、異なる世代間の家族の文脈でアルコールを取り巻く態度と実践がいかに伝達されており、それらに家族構造と育児形態の変化がどれほど影響を与えているかを考察している。

第七章　感情と身体Emotions and Bodies（pp.107-119）はJayne at al.（2010）をもとにしている。ここでは、酒精・飲酒・酩酊に結びついた感情的で身体化された地理に注目している。酒精・飲酒・酩酊と固く結びつけられた生物学的、心理学的、生理学的、そして政治的、経済的、社会的、文化的、空間的な実践と過程の複雑な相互浸透のあいだのつながりを産み出すために、「思い出」「通過儀礼rites of passage」「感情的な会話」について議論している。

あとがき　別れの一杯？ Afterword: ‘One for the Road?’（pp.121-123）は、既出の論文をもとにすることなく、締めくくりとしてごく短く重要な討論と事例研究を再考して、各章を越えた繋がりを引き出し、未来の研究課題を浮き彫りにしている。著者らは、地理学者に対して、政治的、政策的、大衆的な討論に介入を行うと同様に、学問分野の内外で酒精・飲酒・酩酊の研究に寄与する理論的・経験的な前進を

追求するよう要求している。

以上、概略を示したことで明らかなように、*Alcohol, Drinking and Drunkenness*は、文化論的転回以後の人文地理学において研究が蓄積されてきた個別のテーマに酒精・飲酒・酩酊という要素を接合させることによって、新たな知見をもたらすことに成功したひとつの到達点であり、世界の国と地域で今後期待される事例研究の方向性を示した著作といえるだろう。

Ⅳ　最近の研究動向

1　学会・会議の動向

前章で述べたのは、書籍として刊行された仕事に着目したときに見えてきた動向であったが、本節では、最近の研究報告を概括し中心的なテーマを析出する。上述したCGFの投稿をもとに、近年の英語圏人文地理学や近接分野における酒精・飲酒・酩酊にかかわる学会セッションと学際的な会議の動向について述べたい。

まず、人文地理学に関する学会セッションとしては、2012年2月23～28日にニューヨークで開催されたアメリカ地理学会年次報告大会のセッション*Alcohol, Poverty and the City*が挙げられる。主催者はClare Herrick（ロンドン大学キングスカレッジ）, Sue Parnell（ケープタウン大学）、Mary Lawhon（同）の3名である。当日には、セッションIで4本、セッションIIで3本、計7本の報告があり、いずれにおいてもアルコールと貧困の関係性が取り上げられている。現在も主催者らによる南アフリカのアルコール関連問題の共同研究プロジェクトが進行中である（Alcohol, Development and Poverty in South Africa blog）。

翌年には、Ⅲの1で述べたMoreno and Wilton（2013）と同様のテーマを論じた地理学に関わる学際会議“Under control? Alcohol and drug regulation, past and present”が、The Alcohol Research UK主催のもと、2013年6月21～23日にかけてブリストルで開催されている。この学際会議では過去から現在までのドラッグ・タバコ・アルコール規制のあらゆる側面を探究しており、地理学者も貴重な報告を行っている。

2013年にはもうひとつ重要な国際会議が開催されている。“Drinking Dilemmas: Space, Culture and Identity”をテーマとしたこの会議は、テーマが包括的かつ多岐に渡っており、今後の動向を知るうえでより重要であるため詳しく見てみたい。まず、2013年6月に、イギリス社会学会アルコール研究グループThe British Sociological Association (BSA) Alcohol Study Groupの主催で、論文募集があった（CGF Item #22847（4 Jun 2013 13:01））。このセッションの目的は、社会学、歴史学、心理学、法学、地理学、嗜癖研究（addiction studies）などの学問分野を横断して飲酒にまつわるジレンマを学際的に検討し、飲酒と酩酊がもたらす個人的、社会的、文化的な快楽や便益と、公共の秩序、健康、幸福、社会政策に対する懸念の調和を探求することであった。

当初提案されていたトピックを列挙してみると、①ライフコースを通じた飲酒歴とアルコール、②アルコール・子ども・家族、③飲料と国民性、④嗜癖・治療・回復、⑤サブカルチャー内でのアルコールの使用、⑥公的／私的な飲酒空間、⑦農村／都市の飲酒空間、⑧飲酒・ジェンダー・セクシュアリティ、⑨代替手段と断酒、⑩飲料・移住・ディアスポラ、⑪アルコール・仕事・職業アイデンティティとなっている。

実際のセッション内容は以下のとおりであった。初日の2013年12月12日（木）のパネルセッションAでは、「アルコール・治療・経歴」で4本、「飲酒空間」で4本の計8本が、パネルセッションBでは、「アルコール産業と関連機関」で3本、「若者と飲酒Ⅰ」で3本の計6本が、パネルセッションCでは、「アルコールの社会学における今後の方向性」で討論が行われ、「若者と飲酒Ⅱ」で3本が報告されている。そして初日の最後に、基調講演1として、上述の*Urban Nightscapes*の著者の一人である都市社会学者Robert Hollandsの報告が行われている。

二日目の2013年12月13日（金）のパネルセッションDでは、「飲酒・無秩序・コントロール」で3本、「飲酒・コミュニティ・（サブ）カルチャー」で3本の計6本が、パネルセッションEでは、「飲酒儀礼」で3本、「ジェンダーとアルコール飲料Ⅰ」で3本の計6本が、パネルセッションFでは、「テクノロジーと飲料」で3本、「ジェンダーとアルコール飲料Ⅱ」で3本の計6本の報告があった。そして、最後のプログラムである基調講演2では、Mark Jayneが講演者をつとめている[7]。

この会議の成果として、これらの報告のなかから13本を選定してまとめられた論文集が、Ⅲの1でも言及したThurnell-Read（2016）である。掲載された論文の数が絞られているため、会議の際に挙げられたテーマの広がりをうまく生かせていない印象を受けるものの、寄稿者の学問分野は社会学、社会政策学、公衆衛生学、地理学など多岐にわたっており、それぞれの分野の最新の事例研究という点では意欲的な

論集となっている。結論部にあたる終章（Jayne and Valentine 2016）は、上述したJayneの基調講演をもとにしており、イギリスのアルコール研究における人文地理学者の影響がうかがえる。

2　健康・医療地理学とアルコール関連問題

Alcohol, Drinking and Drunkenness 出版後に同著者たちによって発表されたJayne et al.（2012）では、アルコール消費のリスクと便益を理解し公表していくうえで適切な方法を発展させるために、社会・健康・医療の科学者たちのあいだの対話を要請している。前節で取り上げた国際会議、あるいはMoreno and Wilton（2013）やJayne and Valentine（2015）においても、健康や保健衛生の問題が取り上げられているように、アルコール関連問題のなかでも健康・医療に関するトピックは地理学的なアルコール研究にとっても避けて通ることができない課題となっている。

そこで、地理学において健康・医療に関する研究を主導してきた*Health and Place*誌においてアルコールに関する研究がどの程度発表されてきたのかを概観したい。この雑誌は、2012年のインパクト・ファクターの地理学関係部門を見ても*Progress in Human Geography*に次いで高いポイントとなっており、人文地理学分野において国際的に最も重要な雑誌のひとつといえる。詳しいテーマの分析については他稿で論じることとし、ここでは大まかな動向を述べたい。

エルゼビア社が提供するScienceDirectの検索システムを用いて、*Health and Place*における酒精・飲酒・酩酊に関する論文を調査したところ、1995 ～ 2016年に掲載された論考全1,871本のうち「タイトル・要旨・キーワード」にalcoholが含まれる論文は65本、drinking（"drinking water"を除く）が含まれている論文は38本あることがわかる（両者を含むものは26本）。こうした概数からの推察でも、アルコールや飲酒といったトピックが*Health and Place*に掲載される論文においても主要な対象として一定程度取り上げられてきたことが理解できる。

一方、近年日本において発表された健康・医療地理学における展望論文では、酒精・飲酒・酩酊を取り上げた論文の検討が視野に収められていないように見受けられる。たとえば、梶田（2012）は、イギリスにおける政策論的（再）転換による、医学地理学から健康地理学への移行を展望しているものの、酒精・飲酒・酩酊については考察がない。また、社会環境要因による健康格差の問題を整理している中谷（2011）も酒精・飲酒・酩酊について言及していない。これらの展望で引用された個別の論文のなかでは、酒精・飲酒・酩酊に関する諸問題が検討されている場合もあるだろうが、少なくともこの二つの展望論文のなかでは重要な話題として取り上げられてはいないようである。

*Health and Place*誌では、今後も酒精・飲酒・酩酊に関する研究論文が増加することが予想される。そこで論じられるテーマや考察が、日本における酒精・飲酒・酩酊を取り巻く社会環境のもとで参照可能なのかどうかについては十分に吟味する必要があるだろう。

V　結論

本稿では、地理学内での「酒精・飲酒・酩酊」の位置づけが変容してきた過程を明らかにしてきた。これまで辞典・便覧・教科書のなかで主題として取り上げられることが少なかったが、英語圏では近年、人文地理学における新たな動向として教科書等でも取り上げられ、国際学会・会議での関連報告が増加し、個別のテーマに照準した専門書も相次いで出版されており、重要な研究テーマとみなされるようになってきているといえる。

英語圏人文地理学において、酒精・飲酒・酩酊の研究が本格的に開始されるようになった端緒ともいえる、夜間経済に関わるナイトスケープの生産と飲酒への着目という潮流は、近年の諸都市の発展、ジェントリフィケーションの展開、余暇活動や観光の今後を考察する際に非常に重要な視点となっている。また、こうした現象を解きほぐすうえで、子ども・若者の地理のなかで練られてきた枠組みを援用することが有用であることも示した。

さらに、近年の健康・医療地理学では、「アルコール関連問題」特有の課題が検討されるようになっており、諸々の個別テーマのもと世界各地の事例が、*Health and Place*誌などの学際的国際誌でも発表されている状況についても指摘した。

英語圏人文地理学において、酒精・飲酒・酩酊に着目した研究は相当な数に上り、関連づけられるテーマや事例も多岐にわたっていることから、酒精・飲酒・酩酊に関する地理学的研究は、すでに導入期を過ぎ発展期に入っているといえる。それらは当初、地理学における既存の研究テーマに酒精・飲酒・酩酊を関連づける研究が中心であったが、近年では、多様な学問分野から形成されるアルコール研究に新たな知見を加える作業も進展しており、英語圏でも

特にイギリスにおいては大いに成功しているといえよう。

アルコール研究は、スティムソンほか(2007)が概括するように、医療、社会病理学、人類学、社会学に跨がる広がりを見せており、そのうえ、複数の国と地域に酒精・飲酒・酩酊を取り巻く個別のテーマに関する歴史文化、社会経済、政治・法制度を逐一検討する作業が必要となってくる。こうしたアルコール研究の状況を踏まえれば、すでに多様な分野と接合する視点から研究が行われている英語圏の状況を考慮することは、一定の意義が認められると筆者たちは考える。

以上、英語圏の状況を検討してきたが、最後に、最近の日本における重要な社会動向についても触れておかねばなるまい。それらを踏まえ、さらなる日本の事例研究に向けた予察的な論点について簡単に述べておきたい。

まず、2013年の「アルコール健康障害対策基本法」制定によってさまざまな取り組みが増加していく可能性があり、酒精・飲酒・酩酊を取り上げる際、健康の地理という視座はますます重要視されていくことになろう[8]。

背景として、2010年5月のWHO総会における「アルコールの有害な使用を減らすための世界戦略」の採択がある。これを受け、コンビニ・大手スーパーの自主基準が変更されたが、国政においても具体的な対応が求められていた。こうしたなか、議員連盟による法案「アルコール健康障害対策基本法」が2013年12月13日第185回国会において可決・成立することになった。「特定秘密保護法」の成立と同日だったためか各紙の扱いは小さかったが、すでに2014年6月1日に施行されている。この法律は、いわゆるアルコール関連問題に対処するための取組を定めたものであり、アルコールと健康をめぐる新たな動向をもたらす転機となる法律となる可能性があるといえよう(内閣府；アル法ネット)。

関連して、2014年5月28日に日本精神神経学会が新しい指針を公表し、従来から使われていた「アルコール依存症」という言葉を「アルコール使用障害」に改めるよう呼びかけている。これは、米国精神医学会の診断手引「DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 5)」が2013年5月に改訂されたことをうけて、関連学会が共同で名称を検討した結果誕生したものであった(「アルコール『依存症』→『使用障害』など　学会、心の病の名称変更を全国に呼びかけ」『朝日新聞』2014年5月29日付)。

基本法関連の動き以外にも現在、アルコールを取り巻く社会環境はめまぐるしく変容しており、健康と品行という心身の健全性をめぐって、喫煙・飲酒の規制の強化／緩和が政策課題として具体化していくことが予想される。

たとえば、近年、国際オリンピック委員会 (IOC) は、WHOと連携して「喫煙のない五輪」を強力に推進しており、2020年東京五輪・パラリンピックに向けて、日本において飲食店を中心にさらなる喫煙規制が進行していくことは確実である。同時に、これを受けて特定の公共空間における飲酒規制についても議論されていく可能性がある[9]。

飲酒に関しては、投票年齢の引き下げに伴って民法改正による成人年齢の見直し論議が本格するなか、未成年者飲酒禁止法の改正によって飲酒可能年齢を現行の20歳から18歳に引き下げることも選択肢として浮上している。他方で、飲酒による事故、病理、非行・犯罪等への懸念から反論も数多く寄せられているため、実現の可能性は未知数といえ、相争われる論題となっている。

これらの動向を見ても、本稿で取り上げた諸研究の枠組みを援用した研究や、臼井・横山(2013)が着目した、飲酒の文化や規範に関わる研究が必要とされているといえよう[10]。

流通・販売に関しては、アルコール飲料メーカーの世界的な再編のなか、日本の大手ビールメーカーもまた積極的に海外メーカーの買収を進めている。国内でも、酒税法が2016年5月27日に一部改正され、同日には、小売業組合からの申し出に押される形で関連議員が動いたことで、「酒税の保全及び酒類業組合等に関する法律」も改正され、アルコール類の廉価販売の規制を強化することが決定している(「改正酒税法、小売り困惑、廉売防止狙うも、『不公平』の声。」『日経MJ(流通)新聞』2016年6月1日付)。

観光関連でも、2012年以降、訪日外国人数が著しく増加するなか、飲酒文化の理解と体験、あるいは飲酒そのものを主要な目的とした観光である「アルコツーリズムalcotourism」(Bell 2008; Jayne et al. 2012)に一層関心が集まっていくであろう[11]。

このように、近年のアルコールに関する重要な動向だけでも取り上げていくと議論は際限なく広がってしまうため、ここで詳しく論じることはできない。しかし確実にいえるのは、日本におけるこうした新たな社会動向を、人文地理学の下位分野においてそれぞれどのように取り扱っていくべきなのか、個別の事例研究のなかで検討されていく必要があるということである[12]。

グローバル化によって地域文化が画一化と差異化

の圧力を同時に受けるなか、従来のテーマに加え、いわゆるアルコール関連問題としての健康や病理、事故および非行・犯罪といった多方面から、固有の地理を読み解いていく作業も一層求められるだろう。英語圏の着想を借りつつも単に受容することなく、日本固有の文脈を踏まえた事例研究が必要となろう。

われわれは日常生活のなかで、酒席・宴席への参加の可否はもちろん、誰と飲んで誰と飲まないか、自動車の運転があるかないか、健康診断時には飲酒習慣とその頻度がどうであるか、酒類購入時には成人であるかどうかなど、否応なく飲酒に関する選択を突きつけられる機会に遭遇する。筆者たちを含めた地理学研究者も、学生が混じるコンパ、自身のフィールドや巡検先、学会・研究会等の懇親会で、あるいは私生活のなかで、その都度、さまざまな選択を行っているはずである。このように、日常生活に深く根ざした飲食物をめぐるポリティクスを読み解く作業の一環として、酒精・飲酒・酩酊という主題は間違いなく大きな位置を占め続けるであろう。

以上、本稿で行った考察は、今後の事例研究に資するため大まかな見取り図を描くことを優先した。今回、筆者たちが明らかにした英語圏地理学の動向を踏まえるにせよ踏まえないにせよ、個別の文献が扱うテーマの検討は、国内外の具体的な事例研究を通じ深められていくことを期して結びとしたい。

付記

本稿は、日本地理学会2013年秋季学術大会（福島大）の都市社会地理学研究グループ（2013年9月29日）において筆者らが共同で報告した内容に、その後の展開を踏まえて加筆したものである。また、杉山は、日本大学文理学部大学院セミナー（2014年7月13日）において、大学院生に内容を紹介した。両会の質疑応答および懇親会において多くの皆様から意見を頂戴し、本稿執筆の参考にさせていただいた。記して感謝申し上げたい。なお、本稿で言及した*Alcohol, Drinking, Drunkenness*については現在、その重要性に鑑み、原著者たちと連絡を取りながら邦訳出版の準備を進めているところである。

注

1) ただし、臼井・張（2010: 232）は、「主に一定のテーマで研究を続けている研究者」として、青木隆浩、寺谷亮司、八久保厚志、松田松男の四名を挙げ、それぞれの研究の傾向を概説し、「まだまだ蓄積の少ない地理学の酒の研究の方向性を示すものとして、大きな影響を与えていると考えられる」と高く評価している。この箇所で言及されているもののなかで代表的な研究として、ここでは青木（1998）、寺谷（2004［原文では2006］）、八久保（2007）、松田（2004）を挙げておく。加えて、近年では中村周作が「酒と肴の文化地理」を掲げ、独自のフィールドワークの成果を精力的に公表している（中村 2009, 2012, 2014）。

2) 日本地理学会学術大会の直近の発表においても、藤井（2016）、宮坂（2016）のような従来からのテーマに加えて、石原（2016）、中島（2016）のように、アルコール飲料が関わる多様な課題が取り上げられるようになっている。

3) なお、手元にあるWiley-Blackwellの*A Companion to Political Geography*、*A Companion to the City*、*A Companion to Cultural Geography*のE-BOOK版では、アルコールに関する記述は見受けられなかった（それぞれの原著は、Agnew et al. 2002; Bridge et al. 2002; Duncan et al. 2003）。

4) ワインの地域性に関する研究は、日本の地理学者によっても継続して行われている。最近では、竹中・齊藤（2010）が貴重な成果といえる。

5) 杉山は当時、ロンドン大学キングスカレッジの地理学科に研究員として滞在した関係上RSG-IBG 2006にも出席したが、その際、偶然にもこのセッションの発表を聞く機会を得た。二部ともに会場は盛況であり、活発な質疑応答が行われていた。

6) 臼井・横山（2013）も、飲酒規範の変化から生じる飲酒量の増加や酩酊を論じたレビューとしてJayne et al（2008b）に言及しているものの、その意義や位置づけに関して英語圏地理学の潮流を踏まえた検討はなされていない。

7) 当初は、Gill Valentine（シェフィールド大学）も講演者に含まれていた。

8) 最近の学会報告においても、中島（2016）が、断酒会の活動から「アルコール依存症」の構築を取り上げている。

9) WHOが牽引しやがて世界的に広範な影響を持つことになった嗜好品規制として、煙草の社会的コントロールが挙げられるが、村田（2012）は、世界的な動向を踏まえた上で日本での公共空間における喫煙のコントロールを綿密に分析している。このなかで用いられている枠組みは、喫煙を一方的に絶対悪のようにとらえる視点に問題があるものの、飲酒をめぐる地理学的課題の検討においても十分借用可能な考察が含まれている。

10) 日本の地理学においても、アルコールと関連づけて飲食街、繁華街、盛り場あるいは余暇空間を論じる研究が一定数発表されてきた。主題から外れるため詳細は他稿に譲るが、ここでは本稿の文脈上重要だと考えられる、明治・大正期の飲酒規範の変容に焦点を当てた青木隆浩による一連の研究（青木 1999, 2003, 2006, 2008）を挙げておく。いずれも民俗学関連の学術誌や論集に発表されてはいるが、本稿で見てきたように、公共空間における飲酒規範の社会史の究明は極めて地理学的な課題といえ、先

駆的な事例研究として位置づけることができよう。このほかに、夜間における若者の活動を論じた杉山（1999）やエスニック空間の事例としてフィリピンパブを扱った阿部（2011）も、アルコール飲料が消費される空間の実践に着目している。近年では、杉山（2015）が、主体間で意味づけが争われる余暇空間の事例として、神奈川県における海水浴場の健全化に向けた取組のなかで、2010年代に浜辺での飲酒規制が進展した背景と要因を考察している。

11) 菊地（2016）は、フランスや日本のワイン、ベルギーのビールといったアルコール飲料に関連したツーリズムをフードツーリズムの観点から論じている。最近の報告では、飲酒を主目的とした地域イベントとガイドマップの表象に着目した石原（2016）が新たな試みとして注目に値する。近年の「酒造ツーリズム」（観光庁）にもいえるが、これらで取り上げられている事象は、飲酒文化を通じたツーリズムという意味で、広義の「アルコツーリズム」ととらえることができる。

12) たとえば、筆者たちは、昨今の動向に先行して大手チェーン居酒屋に対するいわゆる「ブラック企業」批判が社会問題化していたことに着目し、居酒屋チェーンの増加によるナイトスケープの画一化および均一価格業態の展開動向から、地理学的テーマとしていくつかの問題点を報告している（Futamura and Sugiyama 2013; Sugiyama and Futamura 2012）。

参考文献

青木隆浩 1998. 近代における埼玉県清酒業者の立地選択と酒造技術. 地學雑誌 107(5): 659-673.

青木隆浩 1999. 飲酒規範と近代――「伝統」の流用と未成年者の飲酒禁止を中心として. 日本民俗学 (219): 1-30.

青木隆浩 2003. 身体化する規範――近代の禁煙・禁酒と未成年. 岩本通弥編『現代民俗誌の地平3　記憶』115 -138. 朝倉書店.

青木隆浩 2006. 酒と盛り場. 新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしと民俗学2 都市の光と闇』41-65. 吉川弘文館.

青木隆浩 2008. 近代規範意識とフォークロア　若者文化との対時. 国文学 解釈と鑑賞 73(8): 60-67.

阿部亮吾 2011.『エスニシティの地理学――移民エスニック空間を問う』古今書院.

アル法ネット（アルコール健康障害対策基本法推進ネットワーク）http://alhonet.jp/（最終閲覧日：2016年11月24日）

石原肇 2016.『近畿バルサミット』に参加する団体のガイドマップの類似性と多様性. 日本地理学会2016年秋季学術大会発表要旨集 : 155.

臼井麻未・張貴民 2010. 酒に関する地理学的研究の現状とその課題. 愛媛大学教育学部紀要 57: 227-236.

臼井麻未・横山智 2013. アジアの伝統酒研究の展開――日本における研究を中心に. 地理空間 6(1): 1-18.

梶田真 2012. 1980年代以降のイギリス医学・健康地理学における政策志向的研究の展開. 人文地理 64(2): 142-164.

観光庁2016. 酒蔵ツーリズム. http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/sakagura.html（最終閲覧日：2016年11月21日）

菊地俊夫 2016. フードツーリズムのすすめ―スローライフを楽しむために. フレグランスジャーナル社.

杉山和明 1999. 社会空間としての夜の盛り場――富山市「駅前」地区を事例として. 人文地理 51(4): 396-409.

杉山和明 2003. 若者の地理――英語圏人文地理学における「文化論的転回」をめぐる問いから. 人文地理 55(1): 26-42.

杉山和明 2015. 神奈川県における海水浴場の健全化に向けた取組と地理的スケール――海の家の「クラブ化」問題を中心に. 人文地理 67(2): 166-168.

スティムソン, G., グラント, M., ショケ, M., ギャリソン, P. 著, 新福尚隆監修, 徳永優子・鈴木南日子訳 2007『飲酒文化の社会的役割――様々な飲酒形態、規則が必要な状況、関係者の責任と協力』アサヒビール株式会社. Stimson, G., Grant, M., Choquet, M. and Garrison, P. 2007. *Drinking in Context: Patterns, Interventions, and Partnerships*. London: Routledge.

寺谷亮司 2004. モーリシャス共和国のラム・ワイン・ビール産業. 季刊地理学 56(3): 187-188.

竹中克行・齊藤由香 2010.『スペインワイン産業の地域資源論――地理的呼称制度はワインづくりの場をいかに変えたか』ナカニシヤ出版.

内閣府. アルコール健康障害対策ページ. http://www8.cao.go.jp/alcohol/（最終閲覧日：2016年11月24日）.

中島芽理 2016. 断酒会の空間的展開と「アルコール依存症」の構築. 日本地理学会2016年春季学術大会発表要旨集 : 103.

中村周作 2009.『宮崎だれやみ論――酒と肴の文化地理』鉱脈社.

中村周作 2012.『熊本 酒と肴の文化地理――文化を核とする地域おこしへの提言』熊本出版文化会館.

中村周作 2014.『酒と肴の文化地理――大分の地域食をめぐる旅』原書房.

中谷友樹 2011. 健康と場所――近隣環境と健康格差研究. 人文地理 63(4): 360-377.

八久保厚志 2007. 酒造業における経営近代化の嚆矢とその帰結――会津若松産地における会津酒造株式会社の事例. 人文学研究所報 40: 23-32.

藤井毅彦 2016. 日本のワイン産地における技術伝播――山梨県甲州市勝沼地域を事例に. 日本地理学会2016年春季学術大会発表要旨集 :130.

松田松男 2004. 最近のわが国における清酒流通の変容に関する一考察. 史苑 64(2): 111-126.

村田陽平 2012.『受動喫煙の環境学――健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社.

宮坂　諒 2016. 新潟県における清酒業の存続への対応形態. 日本地理学会2016年春季学術大会発表要旨集 : 129.

Agnew, J.A., Mitchell, K. and Toal, G. 2002. *A Companion to Political Geography*. Oxford: Blackwell Publishing.

Alcohol, Development and Poverty in South Africa blog. http://alcoholsouthafrica.wordpress.com/（last accessed 21 November

2016）

Anderson, K., Domosh, M., Pile, S. and Thrift, N. eds. 2002. *Handbook of Cultural Geography*. London: Sage Publications.

Bell, D. 2008. Destination drinking: Toward a research agenda on alcotourism. *Drugs*: *Education, Prevention and Policy* 15(3): 291-304.

Bridge, G. and Watson, S. eds. 2002. *A Companion to the City*. Oxford: Blackwell Publishing.

Chatterton, P. and Hollands, H. 2003 *Urban Nightscapes: Youth Cultures, Pleasure Spaces and Corporate Power (Critical Geographies 18)*. London: Routledge.

Cybriwsky, R. A. 2011. *Roppongi Crossing: The Demise of a Tokyo Nightclub District and the Reshaping of a Global City (Geographies of Justice and Social Transformation)*. Athens, GA: University of Georgia Press.

Duncan, J., Johnson, N.C. and Schein, R.H. eds. 2003. *A Companion to Cultural Geography*. Oxford: Blackwell Publishing.

Futamura, T. and Sugiyama, K. 2013. Dark Side of the Nightscape: Emergence of Izakaya Chains and Changing Landscapes of Entertainment Districts in Japanese Cities. The 2013 AAG Annual Meeting at the Westin Bonaventure Hotel & Suites, Los Angeles, California.

Gregory, D., Johnston, R.J., Pratt, G., Watts, M. and Whatmore, S. eds. 2009. *The Dictionary of Human Geography 5th Edition*. Oxford: Wiley-Blackwell.

Holloway, S.L., Jayne, M. and Valentine, G. 2008. "Sainsbury's is my Local": English Alcohol Policy, Domestic Drinking Practices and the Meaning of Home. *Transaction of the Institute of British Geographers* 33(4): 532-547.

Holloway, S.L., Valentine, G. and Jayne, M. 2009. Masculinities, Femininities and the Geographies of Public and Private Drinking Landscapes. *Geoforum* 40(5): 821-831.

Jayne, M., Gibson, C., Waitt, G. and Valentine, G. 2012. Drunken mobilities: Backpackers, alcohol, 'doing place'. *Tourist Studies* 12(3): 211-231.

Jayne, M., Holloway, S.L. and Valentine, G. 2006. Drunk and Disorderly: Alcohol, Urban Life and Public Space. *Progress in Human Geography* 30(4): 451-468.

Jayne, M. and Valentine, G. 2015. *Childhood, Family, Alcohol*. London: Routledge.

Jayne, M. and Valentine, G. 2016. Drinking Dilemmas: Making a difference? In *Drinking Dilemmas: Space, culture and identity (Sociological Futures),* ed. T. Thurnell-Read, 205-218. London: Routledge.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, S.L. 2008a. Fluid Boundaries—"British" Binge Drinking and "European" Civility: Alcohol and the Production and Consumption of Public Space. *Space and Polity* 12(1): 81-100.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, S.L. 2008b. Geographies of Alcohol, Drinking and Drunkenness: A Review of Progress. *Progress in Human Geography* 32(2): 247-263.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, S.L. 2008c. The Place of Drink: Geographical Contributions to Alcohol Studies. *Drugs: Education, Prevention and Policy* 15(3): 1-14.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, S.L. 2010. Emotional, Embodied and Affective Geographies of Alcohol, Drinking and Drunkenness. *Transactions of the Institute of British Geographers* 35(4): 540-554.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, S.L. 2011. *Alcohol, Drinking, Drunkenness: (Dis)Orderly Spaces*. Aldershot : Ashgate Publishing.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, S.L. 2012. What Use Are Units? Critical Geographies of Alcohol Policy. *Antipode* 44(3): 828-846.

Knox, P. and Pinch, S. 2000. *Urban Social Geography: An Introduction, 4th ed*. Harlow: Prentice Hall. ノックス，K.・ピンチ，P.著、川口太郎・神谷浩夫・高野誠二訳 2005.『新版　都市社会地理学』古今書院.

Knox, P. and Pinch, S. 2006. *Urban Social Geography: An Introduction, 5th ed*. Harlow: Prentice Hall.

Knox, P. and Pinch, S. 2010. *Urban Social Geography: An Introduction, 6th ed*. Harlow: Prentice Hall.ノックス，K.・ピンチ，P.著，川口太郎・神谷浩夫・中澤高志訳 2013.『改訂新版　都市社会地理学』古今書院.

Moreno, C. M. and Wilton, R. 2013. *Using Space: Critical Geographies of Drugs and Alcohol*. London: Routledge.

RGS-IBG. 2006. RGS-IBG Programme Book 2006. RGS-IBG.

Skelton, T. and Valentine, G. eds. 1998. *Cool Places: Geographies of Youth Cultures*. London: Routledge.

Sugiyama, K. and Futamura, T. 2012. Izakaya chain's paradise? : The cultural landscape of entertainment districts in recent Japan. The 6th Meeting of East Asian Regional Conference in Alternative Geography at Danau Golf Ukm Bangi, Selangor, Malaysia.

Talbot, D. 2007. *Regulating the Night: Race, Culture and Exclusion in the Making of the Night-time Economy (Re-Materialising Cultural Geography)*. Aldershot: Ashgate Publishing.

Thurnell-Read, T. ed. 2016. *Drinking Dilemmas: Space, culture and identity (Sociological Futures)*. London: Routledge.

Valentine, G., Holloway, S.L. and Jayne, M. 2010a. Contemporary Cultures of Abstinence and the Night-time Economy: Muslim Attitudes Towards Alcohol and the Implications for Social Cohesion. *Environment and Planning A* 42(1):8-22.

Valentine, G., Holloway, S.L. and Jayne, M. 2010b. Generational Patterns of Alcohol Consumption: Continuity and Change. *Health and Place* 16(5): 916-925.

Valentine, G., Holloway, S. L., Knell, C. and Jayne, M. 2008. Drinking Places: Young People and Cultures of Alcohol Consumption in Rural Environments. *Journal of Rural Studies* 24(1): 28-40.

Warf, B. ed. 2010. *Encyclopedia of Geography*. Los Angeles: Sage Publications.

Wilkinson,S. 2015. Alcohol, young people and urban life. *Geography Compass* 9(3): 115-126.

English Abstract

This paper reviews recent research in geographies of alcohol, drinking, and drunkenness, which is increasingly becoming an emerging field within Anglophone human geography. By examining writings on alcohol and drinking in major Anglophone geography dictionaries, encyclopedias and handbooks, this paper points out that these topics were gradually raised and discussed in the field of urban social geography after the beginning of the 2000s. This trend became evident after notable national themed-conferences were hosted at several universities and theme sessions were held at the RGS-IBG meeting in London, UK. Subsequently, several edited volumes and co-authored books on related topics were published by British geographers. This paper pays particular attention to *Alcohol, Drinking, Drunkenness: (Dis)Orderly Spaces*, written by Mark Jayne, Gill Valentine and Sarah Holloway. Comprised of articles previously published in various academic journals, the book covers diverse aspects of the topic, such as the city, the country side, home, gender, ethnicity, generations, emotions, and bodies.

Although brewing and distilling alcoholic beverages and drinking practices in Japan had previously been examined by Japanese geographers, their focus were often limited to the interpretation of cultural contexts and lacked a critical perspective, especially in terms of the effects of alcohol and drinking on cities and societies. Meanwhile, research on alcohol, drinking, and drunkenness have been increasingly published by non-geographers in Japan. Professionals in international organizations, such as the WHO, as well as academic scholars in medicine, sociology, and policy studies are starting to examine how alcohol and drinking has negative consequences for Japanese society. In addition, the social environment is changing, as Japan will host the 2020 summer Olympics and millions of foreign tourists are expected to visit Japan, making controlling drinking and drunkenness the target of further scrutiny. This paper concludes by arguing that geographers have a critical role to play in understanding alcohol, drinking, and drunkenness in Japan.

Key words: alcohol, drinking, drunkenness, alcohol-related problems, health